

話題の新刊 おすすめの本

落花流水

渡辺 千萬子作



大正・昭和にかけて活躍した日本画家橋本閑雪の孫として京都に生まれ育った作者が、戦後、義父となった文豪谷崎潤一郎とその家族とともに過ごした日々を語る。谷崎との往復書簡も収録。

かわうそときつね

ごんどう ちあき作



佐賀平野の川のそばにすむかわうそと、天山の山のなかにすむきつねは「ごちそうごっこ」をはじめたのですが…。佐賀弁で語られるたのしい昔話です。ぜひ、声に出して読んでみてください。

だいこんとにんじんとごぼう

つるた ようこ作



むかしむかし、だいこんとにんじんとごぼうのいろは、みんななかよくしろだった。なぜ、にんじんはあかく、ごぼうはくろくなったのかは、この絵本をみてのおたのしみ。

図書館へでかけよう。

【休館日】 11/3(祝)5(月)12(月)
【特別図書整理休館】 19(月)~30(金)

【本のリサイクル】 14(水)~21(水)
リサイクルコーナーは
中央公民館2階ラウンジに設置します



その他 おすすめの本

一般向き

- ◆人はかつて樹だった (長田 弘)
- ◆私生活 (田辺 聖子)
- ◆四書五経入門 (竹内 照夫)
- ◆サボテンライフ (飯島 健太郎)
- ◆なぜ、その人は計算が速いのか? (町田 彰一郎)

児童向き

- ◆まねしんぼう (みやにしたつや)
- ◆龍のすむ森 (竹内 もと代)
- ◆ほらふき男爵の冒険 (ビュルガー)
- ◆青い馬の少年 (ランド)
- ◆ピアトリクス・ポターのおはなし (ウィンター)

「家の上がるときは、はきものをそろえんば。」この言葉は、90歳で亡くなった祖父の口癖でした。小さい頃から、耳にたこができるくらい聞いていたのを覚えています。おかげで大人になった今、よかったです。つくづく感じています。しかし、つい先日、友人と昼ごはんを食べに入った時の出来事です。食事も済み、入口付近を通った時に、子どもの靴が乱れているのを見た友人が、何気なくそろえる光景を目にしました。すると、店の方がそれに気づかれ、ニコッとされ頭を下げられました。最近、失われつつある温かい心に接し、私もいい気持ちになりました。ところで、私、分かっていてもすぐ行動に移さなかったことを後悔しました。こういうことは、日常生活においても、よくあるのではないのでしょうか。たとえば、他人の権利が傷つけられているような場面に立ちながら、だまって見過ごすということです。傍らにいい例だと考えます。傍観者も差別する側に加わっているのと同じです。何事も、これでもいいのかと考えて、一歩踏み出す勇気を持ちたいと思いました。

野田陽子

一歩踏み出す勇気

人権教育 127
ともに生きる

市民文芸

《麦の芽短歌会 多久麦の芽互選》

幼きと砂のお家を作りをり
「ばあばあの部屋」には力の入る
本村 則子
矢筈持つ手元ゆらぎて差し替える
季節に変わる床の間の景
田淵ミチ子
詮無きと分かっていても仏前で
亡夫に愚痴言い涙こぼれり
本田 静香
あら草を抜けば鮮らしおしろい花
月の光をためて紅
栗原 瑛子
雨降れる小庭の塀に掛けられし
両の軍手が涙をこぼす
阿部 睦美

《あざみ俳句会 あざみ俳句会互選》

小さき手を無邪気に合す彼岸かな
田中久美子
スカーフも共に吹かる野分かな
武富 律子
大瓶に通草の熟る旅の宿
中嶋 清子
新盆や遺影の笑みと語りけり
田中 惇子
仕来りを受継ぐ子等の地蔵盆
川内すみ子

《多久川柳会 西山残月選》

時間とは有難きかな痛み去る
田代 弘子
原爆日鐘が猛暑をふるわせる
木下 ユキ
行く先は真暗火中の栗拾う
富安 喜子
ヒマ人がヒマ人にする長電話
松下 修
猫の死に一喜一憂する平和
高塚チカ子